

OPU Students 海外留学レポート

Study Abroad Report from the OPU students



プロフィール (Profile)

氏名 (Name) M. O
所属 (School) 生命環境科学域 自然科学類
学年 (Grade) 2

留学先 (Name of overseas institution)
マレーシア工科大学
留学期間 (study abroad period)
2018/2/18-3/5
記入日 (Date) 2018/3/23

留学レポート Study Abroad Report

蒸し暑い。今現地の空港に到着した。飛行機のトラブルで遅延したせいで身体も精神も使い古されたタイヤのようにボロボロだ。そういえば日本を出たときは気温が5度しかなかったっけ。今は何度だ。日本の6倍もあるじゃないか。見るもの、感じるもの全てが日本と違うことだらけだ。周りで話されている言語は何語かわからない。肌に色も全然違う。店の商品のプライスが安いのか、高いのかすらわからない。向こうで誰かが俺たちを呼んでいる。中には頭に何か被っている人もいる。あれがバディか？ とりあえず近づいてみる。とても笑顔だ。“OPU”と書かれた紙を持っている。どうやらそうらしい。そうしてあまり会話のないまま学校所有のバスに揺られ Scholar's Inn に着いた。それにしてもでっけえ敷地の学校だな。どうでもいいけど街灯少なくて危ないな。とりあえず今日は疲れたから寝るとしよう。

起きた。起きてここが日本の自分の部屋のベッドではないことに改めて気づく。どこに行っても朝には弱いものだ。まだあまり馴染めていないルームメイトと軽い会話を交わす。今日は学校見学の日だ。朝食を取り、身支度をすませてホールに降りよう。降りるエレベーターの中で、自分を待っているであろうバディと初めて話す会話はなんだろうと考えている。相手が女の子となると尚更気をつかう。扉が開いてホールについた。昨日彼女とは軽く自己紹介をかわしておいたので顔と名前はお互いわかっている。着いてすぐに彼女と目があつたので手を振る、が、緊張してうまく笑顔が作れない。無言で近づいていくと彼女はとびっきりの笑顔で出迎えてくれた。笑顔を作れなかった自分が情けない。初めてかわした会話は Are you tired? - I'm okay. だった。初めてかわした会話がこんなに無難になるとは思っていなかったが、まあいい。これから2週間もあるのだから話す機会は山ほどある。幸運なことに、自分のバディは他のどのバディよりもフレンドリーで接しやすく、たくさん話せそうだ。より一層やる気が引き立つ。学校見学はとても楽しい。学校が広くてバス移動の時には常に見たことのない景色を見れるし、見学する施設はどれも大きくてどれも素晴らしいものばかりだ。そんなこんなで学校を巡った後教室に戻ってバディと授業を受ける。

授業で眠るつもりはないので眠気覚ましにバディにこっそり話しかけようか。横を見る。横で振り子のように首を垂れている子がいる。面白くてちょっと吹き出す。眠気が吹っ飛んだ。みんな眠そうにしている。確か、マレー系の女の子って、触ったらダメなんだっけ。あやふやな知識しかなかったのでどうにかして触れずに起こそう。配布された紙があるからこれで物音を立てて気づかせよう。ガシャガシャ、、、フフフ。起きたみたいだ。予定表によれば、この授業が終わると“Lunch Provided”だってさ。どんなご飯が出されるんだろうと思って楽しみにしているとランチタイムの時間になった。

なんだこれ。コメが長くて、色も日本のそれとは違う。一步間違えれば芋虫みたいにもみえる。でもコメだろうとおもってがつつり喰らってみると味の無い、甘みの無い柔らかい感触が口の中に広がる。上にかかっているタレみたいな、ものも表現しづらい微妙な味付けで、まるで太陽が西から昇ってきたと

きのように身体がびっくりして、戻しそうになった。でもなんとか耐えた。横に添えてあるチキンは美味しいのでそれと一緒に食べればなんとかなりそうだ。そうやって苦戦しているとバディが“Is it good?”と聞いてくるのでアイアムファインとしか言えない日本人のように条件反射的に“Yes, it’s great. I like it”と言ってしまった。思ってもいないことを言ったせいで“Do you want more?”と、余っていた弁当を追加されそうになったので、“I’m full.”と言ってことなきを得た。そうして食後の会話をみんなと楽しんでた。解散した後、ルームメイトと夜にコンビニに行った。辛そうなカップラーメンがあったので買ってみんなで回して食べた。死ぬほど辛かった。次の日の朝のトイレを心配しながら眠りに就く。

次の日のトイレはやはり凄まじかった。一緒に食べたメンバーの中にもやばくなった人はいたようだ。気をつけなければ…。昨日の夜コンビニでトイレの消臭剤を買っておいてよかった。今日から本格的に授業の開始だ。ここに来てからまだ身体の疲れが取れないが、俺はここに何をしに来たのかを自分に言い聞かせて頑張ろうと決意する。常夏の国で浮かれてばかりはいられない。

授業はどれも面白く、中でもマレー語の授業はとても楽しかった。ここには英語を学びにきたのだが、マレー語も喋って見たい、マレー語で現地の人と交流したいと感じ始めていた。今までは英語さえ話せば世界中どこへ行っても苦労はしないだろうと思っていた。それは事実だ。しかし、言語はたくさん話せた方がいい。それに改めて気づいた。身をもって実感した。違う国に触れて気づくことはたくさんある。その中の一つを学べただけで大きな収穫だった。このまま楽しい感じで留学を終えることができればいいなとどこかで思っていたが、根底として自分はここに英語を学びにきている。そんな中でオーラルプレゼンテーションの授業が始まった。OPUの授業でもすでに何回か英語でのプレゼンは経験していて、UTMでの授業の多くもそれらと同じだったので自分が学んできたことが世界標準であって、それらをしっかり覚えていたことに自信を感じられた。

マレーシアに慣れ始めてきた頃、現地のバディによる Cultural Session の日がやってきた。毎年マレーシアのバディはかなり入念な準備をしてきてくれているようで、今日はそれを見るのが楽しみだ。Cultural Session は噂通りの素晴らしいものだった。中でも Silat という空手みたいなマレーシアのぶどうはとても良かった。静と動、緩急のついたアクションはとても見ごたえがあり、全員がきっちりそれを揃えているのはとてもかっこよかった。日本の Cultural Session も負けずにもっと練習をして来週の発表に備えよう。

夜になった。バディの車でナイトマーケットにきた。人が多い。人が2人くらいしか通れない幅しかないくらい狭い通路に露店がひしめき合って長い蛇のようにどこまでも続いている。一度は行ったら出て来られないくらいの人と道の長さだ。すごい雰囲気だ。活気があって楽しげだがどこかに危なげな雰囲気の漂うナイトマーケットだ。これぞ東南アジアといった感じだ。日本では絶対この感覚は味わえない。一つ面白いと感じたことは、ここでは偽物がたくさん売っていることだ。しかも彼らはそれらを売っている事になんの恥じらいもない。むしろ自信満々に売っている。それがなぜかとてもファニーだったので衝動で偽物をいくつか買ってしまった。これも旅の記念だろう。そうしてスリル満点なナイトマーケットから帰ってきた。とても疲れた。次の日はマレーシアに来て初めての金曜日だ。ここジョホールバルでは礼拝のために金土が休日になっている。休日なので思いっきり楽しもう。

次の日、休日だがいつもと同じくらい早起きした。今日は行く場所が多い。はじめに歴史博物館に行った。歴史をあまり習って来なかった自分にとって、ここで見たものは驚くものばかりだった。日本による侵略の歴史などが切々と展示されていた。バディや同伴の先生と歴史について会話をしながら博物館を巡った。日本ではどうしてもマレーシアにした功績のみピックアップされるが、過去に犯してしまった影の部分に目を向けることもマレーシアの人々を理解するのに重要なことだと感じた。博物館を訪れた後ショッピングモールに行った。店をめぐる中で、日本のサービスがいかに質の高いものかわかった。また一方でもう少し日本は肩の力を抜いて気楽にしてもいいのではとも思った。宿舎に帰ってからは今週控えているプレゼンと Cultural Session の準備をした。いよいよこの留学も終盤に迫ってきた。かなりバディとも仲良くなれたし、大学内で知り合った日本好きのマレーシア人とも友達になった。ここにきてずいぶん友達ができた。振り返るとあっという間だが、1日1日がとても濃い。日本に帰ってからのこの生活が恋しくなるのは確実だろう。1日1日を噛み締めながら残りの日々を過ごそう。

プレゼンの日がやってきた。この日は Cultural Session も控えている。プレゼンの準備には徹夜をしてしまった。その影響か、肝心のスライドを持っていくのを忘れるというポカをしてしまったが、板書を書いてなんとか埋め合わせができた。臨機応変な対応ができた自分がちょっと誇らしかった。スライドは後で先生に電子メールで送った。Cultural Session は比較的うまくいったと思う。Silat のような見ている人を魅了するようなパフォーマンスはなかったが、日本っぽいことをちょっとは体験させられたかなと思った。反省点は、浴衣とか、着物とか持って行ってあげたら喜ばれたかな。

今日が終わるとこれから準備するものもなくなり、ついに終わりが近づいてくる。いつの間にかこの気候に慣れていた。身体はすこぶる元気だ。見るもの、感じるものにいつの間にか慣れていた。周りで話されているマレー語、英語が何と無くわかる。英語で話すこと、英語で話しかけられることになんかの不安も感じない。とても自身に満ち溢れている。安い物価に慣れてしまって、日本に帰ったらケチになりそうで怖い。自分は知らないうちにマレーシアがとても好きになっていた。